

NTT Pavilion



PARALLEL TRAVEL

カーボンニュートラル社会の実現に向けて

持続可能性、
多様性を重視した建築

NTTパビリオンは東ゲートを入ってすぐ右側に位置する。敷地面積は3500平方メートルと民間パビリオンの中で最大規模であり、三つのゾーンから構成される。建築のコンセプトは「感情をまとう建築」、テーマは「循環するパビリオン」「一緒につくるパビリオン」「生きているパビリオン」だ。再生利用可能な布約18万枚やカーボンファイバー1500本(注1)を活用し、従来の建築に比べて鋼材料を20%、CO₂排出を15%削減し、パビリオン運営に太陽光発電、水素発電、バイオマス発電を活用する。

また、社内外の多くの方々と一緒に制作した天蓋(日よけ)を設けた。来場する子どもたちが未来に対する自分の気持ちを表す色の布を選んで壁面に結び付けることで、パビリオンの色彩が日々変化していく様子は、未来社会においてますます重要となる持続可能性や多様性を表現している。

体験テーマは
「PARALLEL TRAVEL」

NTTは100年以上の間、離れた誰かとつながりたい、大切な気持ちを伝えたい、そんな想いを技術の開発によりつないできた。1970年大阪万博では、ワイヤレスホンを展示して世界の人々を驚かせたが、現在、それは当たり前となった。大阪・関西万博においても、将来当たり前になる未来のコミュニケーションの一端を、いち早く体験いただきたい。その中核となる技術が、2030年代に本格的な社会実装を目指す次世代情報通信基盤「IOWN」(注2)だ。来場者は三つのゾーンを回遊し、



来場者の子どもたちが壁面に布を結びつける

コミュニケーションの未来像とその先にある新たな価値を体験する。ゾーン1では、過去から現在までの通信デバイスを表示し、コミュニケーションによって人の気持ち動く瞬間をスクリーンに映し出す。コミュニケーションの変遷

や「つながる」ことの時代を超えた不変の価値、それでも超えられないコミュニケーションの壁を感じていただく。

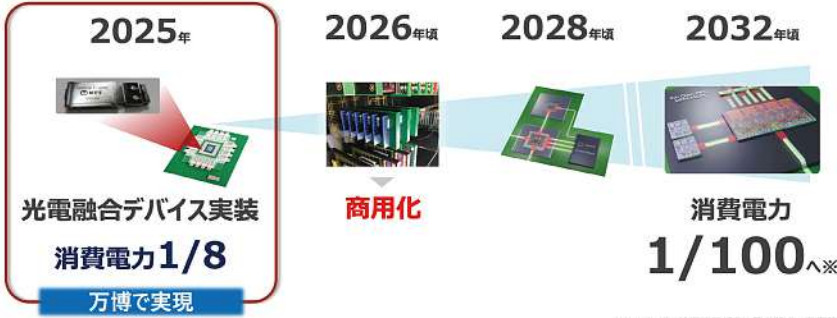
ゾーン2はメイン体験であり、IOWNを最大限に活用し、時間と空間を超えて一つになる体験を提供する。離れた場所、すなわち吹田市の万博記念公園の特設ステージにPerfumeを招き、視覚、聴覚に加え、触覚(振動)を含めてパフォーマンスを丸ごとゾーン2に3D伝送する。また、1970年大阪万博当時の空間もバーチャル技術で再現し、ゾーン2にIOWNで伝送することで、来場者はPerfumeと一緒に時間と空間を超えた体験ができる。

ゾーン3では未来の可能性を感じる体験をしていただく。入り口で来場者の容姿をスキャンすることで生成される「Another Me (デジタル上のもう一

※フォトニクス技術適用部分の電力効率の目標値

テクノロジーの進化と低消費電力の両立に向けて

～IOWN光コンピューティング～



IOWN 光電融合デバイスの開発ロードマップ

人)の自分」は、年齢や容姿などを変えながら自由に動き出す。終盤には来場者のAnother Meが未来の希望の歌を歌う。来場者は自分のAnother Meの様々な変化やAnother Me同士のコミュニケーションに触れ、自分たちの未来の可能性に気付きを得ることが出来る。

IOWN光コンピューティングの実装

NTTパビリオンでは、来場者の盛り上がりに応じて外壁の幕が揺れ、カーボンワイヤーから音が鳴る仕掛けも用意している。具体的には、①ゾーン2で来場者の表情を数十台のカメラで撮影、②IOWNで会場外のデータセンターに伝送、③表情をデータセンターのIOWN光コンピューティングのシステムで高速AI解析、④盛り上がりに応じてパビリオンの幕が揺れ、音が鳴るといったフローを瞬時に実行する。

このIOWNコンピューティングには光電融合デバイスを搭載する。光電融合デバイスは、大阪・関西万博で初めて実装する光信号と電気信号間の変換ロスを削減するキートテクノロジーだ。

当社は今回のパビリオンを、IOWNの最大の特徴である低消費電力機能^(注3)を未来社会に普及していくための第一歩とし、世界的な課題であるカーボンニュートラルの実現に貢献していく。また、持続可能な未来社会に向けた様々な課題の解決、未来のヒトとモノとのコミュニケーション社会の実現に向けて、皆さまと取り組んでいきたい。

(日本電信電話)

(注1)：布やカーボンファイバーは復興支援の一助とすべく石川県の企業より調達

(注2)：IOWN: Innovative Optical and Wireless Network

(注3)：NTTパビリオンで活用するIOWNコンピューティングの電力効率は8倍、これを2000年代に100倍にすることを目指す



NTT 万博特設サイト

© NTT CORPORATION

住友館



さあ、森からはじまる未来へ

400年の歴史を持つ住友は、森を大切に、住友グループの発展の礎にしてきた。私たち住友は、公益との調和を強く求め、人や社会・自然を第一に考える「自利利他公私一如」の事業精神のもと、伐採で荒廃した四国別子の山を約100年もの時をかけて植林を繰り返すことによって、いのちあふれる豊かな森の姿を取り戻した。そして、森や自然と向き合い未来へつなぐ取り組みは、「住友の森」として現在も継承され続け、私たちの理念の原点となっている。そして、この「住友の森」は現在も受け継がれ、持続可能な未来に向けた取り組みの象徴となっている。

住友館は時を超えて、めぐる。

住友館は、住友の森で育った約1000本の木材資源を活用した建築に加え、数十年後、数百年後に向けた未来の森づくりに参加可能な体験型プログラム「植林体験」を実施し、持続可能な自然・資源の循環を体現している。

建築には1970年大阪万博の年やそれ以前に植えられたスギやヒノキなどを建材として使用し、ぬくもりと安らぎのあるパビリオンを再認識し、学びを得る機会を提供する。

未来をつくる大規模な参加型共創プロジェクトを実施

住友館現地での展示体験にとどまることなく、世界中の人々と住友グループで共に未来のアイデアを生み出す参加型共創プロジェクト「ミライのタネ」も実施する。

住友グループには過去から脈々と受け継がれた事業精神を基盤に、数えきれない技術や取り組みと、そこに込めた想い・情熱がある。本プロジェクトでは、住友グループが保有する700件を超える最先端技術や取り組みを統合し、データベース化した。さらに、そのデータをもとに、生成AIを活用して無数の未来のアイデア「ミライのタネ」を創出可能にするウェブプラットフォームを独自開発。万博開催期間中に公開される特設ウェブサイトで、世界中どこからでも、誰もが「ミライのタネ」をつくる事が可能だ。

また、つくられたアイデアや、その基となった住友グループの技術・取り組みの情報は特設ウェブサイトに随時公開している。館



ンをつくりあげている。また、「1本1本のいのちを大切にしたい」という思いから、木材の加工方法に関しても、木材を薄く桂むきにする「合板」を用いることで木々を余すことなく利用。さらに、木材の加工過程で残る「芯」も、ベンチ・階段やグッズなどに利用し、木材資源の有効活用を実現した。

また、来場者に未来の森づくりに参加いただく「植林体験」では、内でも、住友グループ各社それぞれの最先端技術や取り組みの紹介や実物展示に加え、それぞれから創出された「ミライのタネ」を700点以上展示する。

住友グループと世界中の人々との共創によって生まれた「ミライのタネ」が世界中に広がり、いつか芽を出して大きく成長することで、課題解決や豊かな未来社会の実現へとつながっていくことを目指している。

住友館は、これまで培ってきた英知や技術、人材を集結させた住友グループの総合力に加え、多様なクリエイターや企業、世界中の人々との共創によって、社会課題に挑み、新たな社会価値を創造する場にしていきたいと思っている。住友館での体験が、来場された皆さまにとって未来を考える契機となり、私たちが共により良い未来を創造する「キッカケ」となることを願っている。

(住友 EXPO2025 推進委員会)



住友館 公式Webサイト

©Sumitomo EXPO2025 Promotion Committee



開催期間中に約1万本の苗木を用意している。これらは、住友館の建築のために伐採した跡地を含めた「住友の森」へ植林され、数十年後、数百年後の未来へと継承される。参加者には、体験を通じて森林と人との関係や森林循環の重要性を学び、森や自然と向き合い、未来へ想いをはせる「キッカケ」を提供する。

UNKNOWN FOREST 誰も知らない、いのちの物語

では、ここにしかない森の中で、ランタンを片手に、光や音を用いたインタラクティブな体験を提供する。クライマックスには、風や霧が来場者の感覚を揺さぶり、映像・音楽・人が融合するおよそ幅20m×高さ7.5mの「パフォーマンスシアター」で大迫力の演出が繰り広げられる。住友館では、夢のあるエンターテインメントとして楽しんでもらうだけでなく、体験を通して、私たち人間が今まで知ることができなかった様々な「いのちの物語」に触れ、森や自然がもつ多様な価値



パナソニックグループパビリオン「ノモの国」



ココロを映し出す不思議な国「ノモの国」

物と心が共に豊かな理想の社会へ

パナソニックグループは、「物と心が共に豊かな理想の社会」の実現を目指し、長期環境ビジョン「Panasonic GREEN IMPACT」を掲げ、「地球環境問題の解決」への貢献に取り組むとともに、「一人ひとりの生涯の健康・安全・快適」の領域でのお役立ち創出に向けて様々な取り組みを推進している。

2025年に開催される大阪・関西万博では、次代を担う子どもたちが様々な制約や固定概念から解放され、「自分を信じて、一歩を踏み出すきっかけ」を提供することを目指している。

持続可能な社会の実現に向けた活動

パビリオン「ノモの国(英語: The Land of NOMO)」の建築では、「循環」をテーマに掲げ、使用済みの家電から回収した鉄や銅などのリサイクル材料をパビリオンの柱や梁などの主要部材として活用している。また、工場から出る端材・廃材をアップサイクルして活用するとともに、廃材を使った



Unlock体験エリア ZONE4「大空へ」

パナソニックグループ製品なども採用。これらは会期終了後も循環スキームに戻すことで再利用する。

「ノモの国」やコンセプトに込めた思い

パビリオン名称は、「さまざま」なモノはココロの持ちようによってその捉え方が変わる、「いわばモノはココロの写し鏡」という考えから「ノモの国」と名付けた。コンセプトは「解放。ここからからだどじぶんとせかい。」「ノモの国」では子どもたち一人ひとりがこころの持ちようが変わるよ

うな体験を通じて「自分を信じて、一歩を踏み出すきっかけ」を提供したいと考えている。そんな思いを込めて、タグラインを「Unlock your nature」とした。また、「Unlock your nature」には、子どもたちだけでなく、パナソニックグループもこの万博を契機に、新たな一歩を踏み出していきたいという思いも込めている。

子どもたちの感性を刺激し、想像力を解き放つ体験型パビリオン

パビリオン「ノモの国」は、パナソニックグループが長年培ってきた「ひとの理解」研究に基づく技術や光・音・風などの「空間演出」の技術を活用し、子どもたちの感性を刺激することで想像する力を解き放つ体験型パビリオンである。「ノモの国」は子どもたちが常識や思い込みから解放され、自身に秘められた力を解き放つ約30分間の非日常体験ができる「Unlock体験エリア(922平方メートル)」と、研究開発中の技術で未来社会のアイデアを具現化した展示エリア「大地(165平方メートル)」で構成され、より良い未来を共に考えるきっかけを提供する。



展示エリア「大地」

「Unlock体験エリア」は四つのゾーンから構成され、立体音響や三百六十度映像、振動や風を用いたハプティクスなど光・音・空気に関する技術を用いた体験や巨大な映像を映し出す幅7メートル×高さ3.5メートルの「ミストウォール」をくぐり抜ける体験を提供するほか、直径1.3メートルの映像が天井から目の前に降り注ぐ「ボルテックスリング」による幻想的なミスト演出なども行い、子どもたちの五感を

刺激するイメージ的な空間を実現している。この「Unlock体験エリア」では、無線タグ(RFID)やカメラによって一人ひとりの行動データを独自開発した感性モデルで分析するほか、表情データを基に感情を分析することで、子どもたち一人ひとりの秘めた力や可能性を、ストーリーとして「蝶」のモチーフと一緒に描き出す。

展示エリア「大地」では、「食の未来」を考える「シアノバクテリア(光合成微生物)」、「エネルギーの未来」を考える「ペロブスカイト太陽電池」、「モノづくりの未来」を考える「生分解性セルロースファイバー」、発光性微生物のチカラによる「あかりの未来」を考える「バイオライト」、バイオフィリックデザインの考え方を活用した、「バイオセンサードーム」など、研究開発中の技術に触れたり、匂いを嗅いだりする展示体験を通じて、ひとと自然が調和する未来を体感する機会を提供する。

ノモの国の原作ストーリー

「ノモの国」では、パビリオンでの体験をより楽しんでもらう、あ

万博のその先へ

パナソニックグループは、子どもたちに想像する力を解き放つ機会を提供し続けるため、会期中のパビリオンでの体験だけでなく、閉幕後もレガシーとして子どもたちとつながり続けるオンライン次世代共創プラットフォーム(仮)の構築にも取り組んでいる。今回の大阪・関西万博を契機に、次代を担う子どもたちの未来をより豊かで希望に満ちたものにできるように取り組みを加速していく。(パナソニックホールディングス)



「ノモの国」公式Webサイト

©Panasonic Holdings



三菱未来館



三菱未来館 ツアーナビゲーター「ナナ・ビビ」

いのち輝く地球を未来に繋ぐ

深海から宇宙へ
いのちを巡る壮大な旅を体験

三菱グループは、1970年の大阪万博、2005年の愛・地球博と連続で三菱未来館を出展してきた。本館のコンセプトは「いのち輝く地球を未来に繋ぐ」と定めた。「いのち」にまつわる、「いのちの始まり、いのちの未来」「いのちの尊さ」「いのちの出会いと共に生きる奇跡」といった様々な思いや不思議を共有し、来館者一人ひとりが「いのちの未来」を想像する時間と空間を体験できるパビリオンを目指している。

展示テーマは、「いのちの始まり、いのちの未来 JOURNEY TO LIFE」未知なる深海から遙かなる宇宙へ、いのちを巡る「壮大な旅」とし、来場者はバーティカルシャトル JOURNEY TO LIFE号に乗り込み、深海から火星までの7500万キロの旅を体験する仕掛けである。没入型の体感シアターで展開される三つのショーは圧倒的なリアリティがあり、その迫力とスピード感・浮遊感を共有するこ

建築デザインとサステナビリティ

パビリオンの設計は三菱地所設計が手がけ、「生命・地球・人間のつながり」をコンセプトに、長方形・ひし形・楕円といった幾何学模様を、人間・地球・生命にそれぞれ見立て、多くの生命を育む地球、その地球と共に生きる人間の支え合う関係性を表現している。

また、資源を循環的に再利用あるいは転用することを重視し、建設工事で発生する掘削土を新たな資源として再利用し、建設から解体までの過程をトータルにデザインすることを目指している。持続可能性を考慮し、リサイクル可能な杭や再利用可能な建材を採用した環境負荷の低い設計も特徴である。

体感型シアターと映像制作

パビリオンは地上に浮かぶマザーシップのような外観である。地下空間から「船内」に入った後、三

つのエリアでの時間・空間のリアルな映像体験を通して「いのちの未来」を感じることができる。好奇心旺盛な双子のナビゲーション生命体「ナナ」と「ビビ」が、来場者を壮大な旅へと案内する。

メインショーでは、幅11m、高さ9mの天井まで広がる巨大スクリーンによる没入型映像体験が提供される。映像コンテンツは、アストロバイオロジー研究の第一人者である東京科学大学地球生命研究所長の関根康人教授が総合監修を手がける。日本のみならず、オ

ーストラリア、タイなど、万博にふさわしいグローバルな制作体制で、科学とエンターテインメントを組み合わせた最先端の映像およびCG技術を投入することで、三菱未来館でしか体験できない映像体験を提供する。音楽は映画やドラマの劇伴音楽などで世界的に活躍する作曲家の村松崇継氏が担当し、壮大な旅の世界観を表現する。

三菱未来館の目指す未来

当館は、来場者に「いのち」の尊さや未来への可能性を感じても

らうことを目指している。パビリオンでの体験を通じて来場者一人ひとりが「いのちの未来」を想像し、地球環境や社会の持続可能な発展について考えるきっかけとなることを期待している。

大阪・関西万博で万博を初体験する若い世代は、2050年の脱炭素化をはじめとする多くの地球規模課題の解決を中心的に担う世代だ。そうした未来世代の皆さんに、当館における映像体験から、課題解決に向けた志や気付きが芽生えることを願っている。現在、

「高校生MIRAI万博」というプロジェクトが進んでおり、全国から選ばれた志ある高校生たち60名が仲間としてつながり、世界に向けた提言・メッセージづくりの真只中である。この成果は、7月31日の「三菱パビリオンデー」で世界に発信する予定である。そのほか、フォトコンテストや子ども絵日記フェスタなど、未来世代が主役となる様々な特別イベントを予定している。

3月1日に開催された竣工式では、多くの関係者の方々に実際にパビリオンで映像を体感する大規模な内覧会が行われ、万博の開幕に向けた最終準備が整ったところである。大阪・関西万博は世界中から多くの人々が集まり、地球規模の課題に取り組むための知恵が集まる場である。当館はその一翼を担い、未来へのメッセージを発信していく。

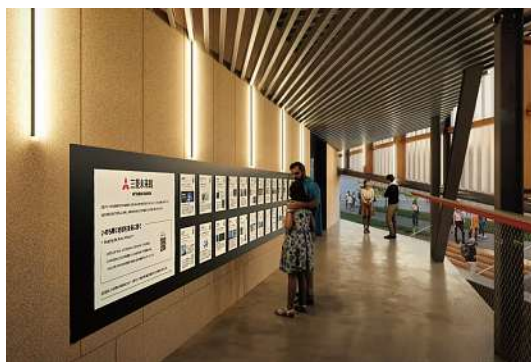
(三菱大阪・関西万博総合委員会)



プレショーエリア



メインショーエリア



ポストショーエリア



三菱未来館
公式Webサイト

©mitsubishiexpo2025

(注)三菱グループ：大阪・関西万博では、グループ30社からなる三菱大阪・関西万博総合委員会(委員長：野島 嘉之/三菱商事代表取締役常務)が出展

電力館 可能性のタマゴたち



電力館キャラクター
「可能性のタマゴ」

可能性のタマゴで未来を切り開く

電力業界ならではの視点で 未来社会を描く

電気事業連合会は、これまで日本で開催された万国博覧会へ、パビリオンを4回出展し、延べ約1920万人の来館者へ、エネルギーの歴史やその時々々の最新技術、未来の姿を伝えてきた。

5回目の今回は、「電力館可能性のタマゴたち」において、「エネルギーの可能性で未来を切り開き、いのち輝く未来の実現へ」をテーマに、2050年カーボンニュートラルのさらにその先を見据え、社会の基盤を支える電力業界ならではの視点で未来社会を描く。

電力館は、大阪メトロ夢洲駅そばの東ゲートから入ってすぐ、会場のシンボルである大屋根リングの外側に位置する。様々な形の平面で構成される「ボロノイ構造」を採用したタマゴ型の外観が特徴である。2100本超の鉄骨を複雑に組み合わせ、その上に不燃膜材を張り合わせ、60種類、352枚のボロノイを浮かび上がらせている。シルバー色の膜は、未来に向けた可能性を表現するとともに、日光や空の色を取り込んで天候や

時間帯によって多様に見える方を変化させ、自然や周囲の環境と調和する。

体験の鍵となる タマゴ型デバイスと 三部構成の展示体験

来館者は、パビリオンに入ると、様々な色に光る「タマゴ型デバイス」から好きなタマゴを一つ選び、首から掛けて館内をめぐる。デバイスの外装素材は、プラスチック削減に独自技術で取り組む企業の協力により、卵の殻とホタテの貝殻の廃材を配合して制作したものだ。展示の内容や来館者の体験に連動して色鮮やかに光ったり、震えたりすることで特別な体験を提供する。その色や光り方、震え方は約50パターンを予定している。

電力館の内部は、「プレシヨール」「メインシヨール」「ポストシヨール」の3部で構成され、メインシヨールは、未来を切り開くエネルギーの可能性を体験する「可能性エリア」と、いのちの輝きを体験する「輝きエリア」の二つのエリアから成る。

まず、プレシヨールでは、カーボンニュートラルの実現に向け、たく

さんの「エネルギーの可能性」を探すと、これから始まる体験を、映像とタマゴ型デバイスの連動で紹介する。来館者はここでパビリオンの世界観を感じると同時に期待を高めていく。

エネルギーの面白さに フォーカスした展示体験を

2階のメインシヨールの「可能性エリア」では、未来を切り開く可能性を持つ約30のエネルギーを展示している。展示は、それぞれのエネルギーの特徴や面白さにフォー

ーカスし、ゲーム要素を取り入れている点の特徴である。映像を見ただけでなく、全身を使って体験することで、楽しさや驚きと、気付きや学びの両方を持ち帰ってほしいと考え、啓発性とエンターテインメント性の双方を意識して制作を進めた。

例えば、「核融合」の展示では、モーションキャプチャーセンサーによって手の動きと卓上の映像が連動する。卓上に投影された、原子核に見立てた光る球をタマゴ型デバイスにくっつける(融合させ

る)体験を通じ、反発し合う二つの原子核をうまく融合できた時に膨大なエネルギーが生まれる「核融合の原理」を体感できる。卓上で光の球を集める動作は大人でも意外に難しく、つい夢中になってしまふ。また、「無線給電」の展示は、目の前に次々と映し出される家電や車など電気動くモノに対して、離れたところから無線で電気を放射して動かすシューティングゲーム型の体験だ。様々なモノへ無線で給電がなされる便利な未来を楽しみながら体感する。

このほかに、潮流発電、波力発電、マイクロ水力発電、ペロブスカイト太陽光発電、宇宙太陽光発電、マグマ発電、振動力発電、直流送電、ヒートポンプ、ソルガム、コンクリート電池などを展示する。様々な可能性を体験した後は、「輝きエリア」へ。ここでは、大空間の中に立体的に配置した無数のLEDによる光や音と、来館者の持つタマゴ型デバイスが連動するイマーシブシヨールを体験する。

最後のポストシヨールでは、図鑑をコンセプトとした空間での実物・パネル展示を通じ、メインシヨールの体験を振り返り、実は身近なと

ころにもたくさんさんのエネルギーの可能性があることを実感できるようになっていく。

未来のエネルギーを考える

電力館では、こうした館内での展示体験のほか、併設の屋外ステージにおいて多様な体験を提供する計画だ。

100人ほどが収容できる屋外ステージで、万博会場全体で行う「パビリオンデー」「テーマウィーク」などと連動した独自のイベントや、エネルギー関連機関、科学館、大学や企業など様々な団体とのコラボレーションイベントの実施を検討している。

万博は世界中から人、モノ、英知が集まる場である。20年ぶりに日本で開催されるこの万博に多くの人々の来場を期待するとともに、一人でも多くの子どもたちに、電力館で未来のエネルギーについて考えてもらいたい。

(電気事業連合会 大阪・関西万博推進室)



電力館特設
ウェブサイト

ガスパビリオン おばけワンダーランド



コンセプトは「化けろ、未来！」 様々な「化ける」を発信

都市ガス業界のカーボン ニュートラル化への取り組み

1872年、ガス事業は横浜馬車道通りのガス灯から始まった。それから約100年後の1969年11月、日本初の液化天然ガス(LNG)タンカーが東京ガスのLNG基地に着船。翌1970年の大阪万博では、日本で初めて都市ガスによる地域冷暖房が採用された。その後、都市ガス業界は省エネルギーに資する様々な技術開発を進め、低炭素化に貢献してきた。

そして現在、2050年のカーボンニュートラル社会の実現に向けて、都市ガス業界はさらなる「進化」、すなわち「化ける」取り組みを進めている。その一つが、二酸化炭素(CO₂)をリサイクルし、水素と合成(メタネーション)させ、「eメタン」という都市ガスの原料となる合成メタンに変える技術の開発である。CO₂の増加を抑制すると同時に、既存の都市ガスインフラや消費機器を利用できるというメリットもある。

日本ガス協会が展示するガスパビリオンのコンセプト「化けろ、未来！」には、このような都市ガスや音を用い、さらに実際に触ってもらおうといった工夫により、楽しみながら学べ、記憶に残る展示を目指している。

メインターゲットである子どもたちには、ドキドキ・ワクワクな体験を通じて、社会課題や地球温暖化などの解決には、一人ひとりの意識や行動を大きく変えていく(化ける)必要性があることを自分事として感じてもらいたい。未来を希望に満ちた姿に変えていく(化ける)ため、「一歩踏み出してみよう」という気持ち(子どもたちの胸に芽生えるよう、環境や未来のエネルギーについて考えるきっかけを提供する場になればと考えている。

「化ける、建築」を目指して パビリオンを設計

パビリオン自体も「化ける、未来！」のコンセプトに基づいて設計した。パビリオン全体を覆う膜材には大阪ガスが開発した放射冷却素材「SPACECOOL」を使用し、室内温度上昇の軽減や室内空調の冷房負荷の低減による省エネ・低炭素化を実現している。

天候、時間帯、見る位置によって、様々な表情に変化(化ける)し、

ス業界のカーボンニュートラル化への取り組みが含まれている。

2025年大阪・関西万博は、都市ガス業界にとって、地域や暮らしに寄り添いながら未来に向けて変わっていくこと、すなわちCO₂を都市ガスエネルギーに変える(化ける)メタネーション技術開発の促進とeメタンの普及に使命感をもって取り組んでいくことを世界に広く発信する貴重な機会であり、ご来場者にはしっかり訴求していきたい。

万博会場内では、環境省の「既存のインフラを活用した水素供給低コスト化に向けたモデル構築実証事業」のもと、大阪ガスがeメタンの製造実証を行う。会場内で発生する生ごみ由来のバイオガスに含まれるCO₂や会場内で回収予定のCO₂と、再生可能エネルギー由来のグリーン水素から、メタネーション装置によりeメタンを製造し、迎賓館の厨房や熱供給施設で利用する予定である。さらに日本各地の都市ガス事業者が製造したeメタン・バイオガスの環境価値を、万博会場に供給すること、大阪・関西万博のカーボンニ

夜間はライトアップにより「カーボンニュートラルな炎」を演出する。膜構造の建物とすることで建築部材を削減し、主要な構造部材やバックヤードの大部分を建設用リース材料で構成することでリユースを容易にしている。

万博終了後は、床材・空調設備などの再利用、膜材などの再生利用を積極的に行うことで、形を変えながら、引き続き使い続けられる「化ける、建築」を目指している。2024年10月からは、都市ガス事業者が日本各地で実施する小学校への出前授業において、万博やガスパビリオンの魅力を紹介し、万博開催の機運を高めていく「ミライ教室キヤラバン」を行っている。ガスパビリオン、「ミライ教室キヤラバン」を通じて、未来を担う子どもたちに、一人ひとりの意識や行動を変えていく(化ける)ことで未来も変えられる(化ける)ことを伝えていきたい。

(日本ガス協会)



ガスパビリオン
公式Webサイト

©日本ガス協会

環境や未来のエネルギーを 考えるきっかけを提供

「ガスパビリオン おばけワンダーランド」は、未来を担う子どもたちの記憶に残り、豊かな心を育む原体験となる来場者参加型エンターテインメントパビリオンを目指している。「化ける」を象徴するキヤラクターとして、案内役おばけの「ミッチー」やその仲間の7体のおばけたちが登場し、来場者がおばけたちと一緒にドキドキ・ワクワクしながら、新しい気付きや

行動を変えるきっかけが得られる仕掛けを用意している。

メインのアトラクションでは、来場者はXR(クロスリアリティ)ゴーグルを装着することでおばけの姿に変身し、おばけワンダーランドを体験する。最新のXR技術により、現実の世界から拡張現実(AR)の世界、仮想現実(VR)の世界へのボーダーレスな没入体験ができる。これはこれまでにない迫力ある体験だ。

eメタンをはじめとするガス業界の取り組みや環境エネルギー技術についての展示も行う。映像、



パビリオン外観



メインアトラクション